

花に舞い風に吟ず

翔堂 鷺野正明 作

扶桑 地闢きてより詩を以て花とし

瑞穂 風来つて歌唱華やかなり

声は梁塵を動かして神復た躍り

楽は堂奥を窮めて 趣逾いよ遐かなり

霜刀一閃 斬りて悪を懲らし

彩扇飄搖 合して霞を織る

心身を鍛錬して恒に義を貴べば

士峰と共に並びて誉れ涯無けん

花に舞い風に吟ず

翔堂 鷺野正明 作

扶桑地關以詩花

扶桑 地關きてより詩を以て花とし

瑞穂風來歌唱華

瑞穂 風來つて歌唱華やかなり

聲動梁塵神復躍

声は梁塵を動かして神復た躍り

樂窮堂奥趣逾遐

樂は堂奥を窮めて趣逾いよ遐かなり

霜刀一閃斬懲惡

霜刀一閃 斬りて惡を懲らし

彩扇飄搖合織霞

彩扇飄搖 合して霞を織る

鍛鍊心身恆貴義

心身を鍛鍊して恒に義を貴べば

士峰同竝譽無涯

士峰と共に並びて譽れ涯無けん

大意

扶桑の国（日本）ができてより詩を花のように愛で、瑞穂に風が吹いて（世が平和になると）、歌唱が華やかに起こった。

詩を歌えば、その声は梁の上の塵をも動かし（感動させ）人の神（心）も躍り出す。樂器の響きは奥義を窮めて趣はますます広がっていった。

さて、舞いは、霜のような刀がひと閃きすると、惡を切り、懲らしめ、美しい扇がひらひらして、合わさつて霞（朝焼け・夕焼け）を織りなす。（剣舞のすばらしさ）

心身を鍛鍊して恒に義を貴べば、富士山とともにならんで譽れは限りない